エスケープ

日野五十鈴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
エスケープ

【Ｎコード】
Ｎ４２９４Ｋ

【作者名】
日野五十鈴

【あらすじ】
父による母殺害を目の当たりにした娘は真夜中、街へ逃亡する。はたして娘は無事、父親の凶手から逃げられるのか…！

もう殺すしかないと思った…。

俺には年上の女房と高校生の娘がいる。

あと、これは秘密だが…ひとまわり年下の愛人もいる。

いわゆる不倫というやつだ。

彼女はしきりに言う。『いつ奥さんと別れてくれるのぉ？』と。

だが、気弱な俺の口から妻に離婚を切り出すなど到底無理だった。当然、不倫を明らかにすれば妻は激昂するだろう。もし家裁に持ち込まれようものなら、俺に経済的余裕はない。

第一、俺はヒラのサラリーマン。慰謝料を一生払うこと、なんて判決が出たらどうする。高校生の娘がいることを盾に、慰謝料の他に養育費を請求されてもまた困る。

…もう殺すしかないと思った…。

もう妻と愛人との板挟みには疲れた。

どちらかとはキッパリと別れなければいけない。

俺が愛していたのは…家庭ではなく、年下で甘え上手の愛人の方だった。

覚悟は決まった。

俺は深夜に目を覚ますと、台所から包丁を持ち出し、それを寝室で寝ている妻の心臓目掛け突き刺す！！

ビシャッ…！

大量の血を溢れさせ、妻は即死した。

次に俺は返り血を浴びたまま、娘の部屋へ向かった。

アイツは勘がいい。妻を殺したことがバレてはまずい。それ以前にアイツは。

…俺が不倫してることに気づいてるかもしれない。

もちろん、妻の死は警察沙汰になるだろう。そこで娘は言うかもしれない。俺に不倫の疑惑がある、と。

当然、不倫の件はすぐにバレる。そうしたら殺す動機も充分にある

し、一方で娘には母親殺害の動機がない。罪は着せられないだろうし、第一、調べられたらすぐに俺が犯人だと分かりそうなものだ。

…殺るしかない…！

俺は娘の部屋を開け、そのままベッドへと歩み寄った。

だが。

「っ！？」

掛け布団には何の膨らみもない。

娘は俺に殺される前に逃げ出したのだ。

●○●

私は夜道を走っていた。

あのままでは父に殺されると思ったから。

最初に父の不倫に気づいたのは、ケータイに浮かび上がる名前から

だった。

『朱里』

名字はなく、ただそれだけ。

それだけで、その人が父と深い関係にあると察しがついた。

頻繁に父のケータイにかかってくる電話も、その時だけ声のトーンが違うことも、そしてその電話が土曜の夜と日曜日だけかかってこないことも、合点がいった。

そして今日、残業から帰ってきた父の頭から、シャンプーの匂いがしたのだ。

…私にはそれが、何か不吉な予感を漂わせているように思った。

私はパジャマから普段着に着替えて、ベッドの中でただ月の行方を辿っていた。

…何かあったらすぐ逃げられるように…。

はたして、それは的中した。

ガサゴソという物音に耳をそばだてて、こっそりキッチンから出てきた父のあとをつけると、父は母の胸に包丁を突き立てたのだ。

「……！」

…殺られる。

…あれが来たら、殺される。

（お母さん、ゴメン…）

私は父の足音に紛れるようにして玄関に向かい、スニーカーを履いて夜の街へ飛び出した。

問題は、身を隠す所だった。

交番はまずい。父が母を殺したんですなんて言ったところで、きっと信じてもらえないだろう。もしかしたら家出か何かと勘違いされて、すぐ父の手に捕まってしまうかもしれない。

親戚の家もまずい。父は間違いなく、私が家出したとでも言って、親戚中に電話をかけまくってることだろう。そうしたらみすみす父の網にかかるようなものだ。

となると…。

私は思い立って、まず親友の栄子（えいこ）の家に逃げ込むことにした。

●○●

「もしもし、俺だけど」

俺は親戚中に電話をかけまくっていた。もちろん、家出したと嘘をついて。

だが、そのどこにも娘はいなかった。

「…分かった、ならいい。あとは俺の方で捜すから…」

これで娘の足で逃げられそうなところ全てに電話をかけたが、そのどこにもいなかった。

となると…あとは…。

俺はダイニングに向かってあるものを物色していた。

年賀状。

逃げるとしたらあとは友達の家しかないだろう。しかも最近の友達ならより確実だ。

そして年賀状には必ず送り主の住所が書かれている。

そこから一番近くにある友達の家を探る。きっとそこにいるはずだ。

どうも、宍倉(ししくら)栄子という友達の家に潜んでいるらしい。

俺は急いで返り血をシャワーで流して、血まみれのパジャマから普段着に着替えた。

そしてその住所を頼りに、宍倉家へと向かった。

宍倉家は俺の急ぎ足で5分という、わりと近いところにあった。

こんな夜中に明かりがついている。ということは、娘がここに逃げ込んだ可能性が高い。

俺は逸る気持ちを抑えてインターホンを鳴らした。

「はい」

出てきたのは娘と同じくらいの女の子だった。では彼女が宍倉栄子だろう。

「夜分遅くに申し訳ございません。七瀬明日美（ななせ・あすみ）の父ですが、そのぉ、娘がお宅にお邪魔してないでしょうか」

訊くと、宍倉栄子（とおぼしき人）は頷いた。

「ええ。さっきまでいましたよ。でもさっき家に帰るって出ていきました」

俺はにやけ顔を抑えるのに精一杯だった。

「あ、そうですか。それはご迷惑をおかけしました」

そして深々とお辞儀をしてドアが閉められるのを待つ。顔を俯かせたまま振り返って、俺はようやく闇に向かってニィと笑った。

…見ぃつけた。

急いで家に帰ると、娘の部屋の明かりがついていた。きっとあの中だろう。

警察に電話してないことは、まだサイレンの音がしてないことで分かった。ならば娘さえ殺してしまえば…！

俺は極力音をたてないようにして玄関に入っていった。

誰もいない…ように見えたその瞬間。

腹に鈍い衝撃がきた。

「……？」

俺は視線を下げた。

手袋をして、俺が妻を殺した凶器…包丁を握っていた。

「…明日…美…っ」

娘は歯を食いしばり、握った包丁を引き抜くと、もう一度刺した。

俺の心臓目掛けて。

●○●

父を、殺した。

時は数十分前に遡る。

私は栄子の家に押し掛けて、それから間もなく裏道を通って家に帰った。

父が家を出、すぐに帰ってくるように。

この空白の時間で父を殺す準備を整えるために。

父が、私の友達の家に押し掛けることは分かっていた。親戚の家にいないなら、絶対にその方面で捜すだろうと思ったから。

私は夜道を走りながら、毎年必ず年賀状をくれる、家も近い栄子の家を選んだ。捜すとしたら、まずは年賀状を頼りに住所を割り出し、近場から攻めていくだろうと思ったから。

はたして、それは的中した。

だから、こうして父を待ち構え、この手で殺した。

…殺らなければ、必ず殺られると思った…。

私は父の死体を寝室に引き摺りながら思った。

手袋をしていたから、包丁には父の指紋しかついていない。母を殺した容疑は父にふりかかるはずだ。

しかし、理由はどうあれ、私はこの罪を一生背負わなければならない。…でも。

…もう、疲れた。

家族の平穏を願って父の不倫を深く追求しないできたのに、あろうことかその父が母を殺し、私を殺そうとした。私の必死の努力はこのような形で簡単に裏切られたのだ。

復讐くらい、なんだ。

…今更こんなことで、心を動かされたりしない。

ｆｉｎ.

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4294k/

エスケープ

2010年10月28日04時29分発行